

---

# 魔法少女まどか マギカ Re-connect

だんご虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ Re-connect

### 【Nコード】

N9215S

### 【作者名】

だんご虫

### 【あらすじ】

明日、もっと多くの人が笑顔になれると信じて

見滝原中学に通うごく普通の中学2年生、柳瀬旭。

幼馴染の鹿目まどかや親友の美樹さやか、志筑仁美と、とりとめもない、だが幸せな日常を送っていた彼が、魔法少女、そして魔女と関わったとき、彼と彼をとりまく運命の輪は大きく廻り始めた……。

## 0 プロローグ(前書き)

Caution!!

この小説は成分に多大な

- ・ 原作ネタバレ
- ・ ご都合主義
- ・ 独自設定
- ・ 独自解釈
- ・ 原作改変
- ・ オリジナル主人公
- ・ 駄文

以上のものを含みます。

これらによりアレルギーによる精神的嫌悪感を催す方はブラウザの戻るボタンをクリックすることを強く、お勧めいたします。

## 0 プロローグ

「なんで泣いてるの？」

いつものように近所の公園に遊びに行くと、一人の女の子が公園のベンチに座って泣いていた。

「…ピーちゃんが死んじゃったの。」

話を聞くと、どうやら大切にしていたペットの鳥が死んでしまったらしい。

俺は誰かが泣くのは嫌いだ。

だから、なんとしてもこの女の子には泣き止んで欲しかった。しかし、俺にはペットが死んでしまった悲しみはわからない。

よって、どうすればこの女の子が泣き止んでくれるのか皆目見当がつかなかった。

少しの間、考える。

すると一つの方法が思い浮かんだ。

「ピーッ！ピーピー！ピッピー！」

鳥の真似をしながら少女の周りを走り回る。

我ながら訳が分からないが、これしか方法が思い浮かばなかったのだから仕方がない。

「え、ええっ？なにやってるの…？」

案の定、女の子は訳が分からない様子だ。

そりゃそうだ。だって俺にもわからない。  
お互いに訳の分からないまま、訳の分からない行動を続ける。

「ピー！ピッピー！ピクシー！」

「ぶっ、あはははは…。」

俺の作戦？は功を奏したのか、女の子は泣き止み、笑ってくれた。

「よかった…。」

「え？」

「俺にはさ、ピーちゃんが死んじゃったのが、どれだけ悲しいとか  
そういうのはわかんないけどさ、  
でも、いつまでも泣いてることが、ピーちゃんのためにはならな  
いと思うから。」

だから、笑ってくれてよかった。」

…この後、俺と女の子でピーちゃんのお墓を作って、その後は夕方  
になるまで一緒に遊んだ。

こんなよくわからない出来事が、俺こと柳瀬旭と、その幼馴染、  
鹿目まどかの出会いだった。

## 0 プロローグ（後書き）

皆さんはじめまして。

このたび、小説初投稿となるだんご虫です。

のっけからよくわかんない文章書いてすみません。

文章力がない人が小説書くところなるね。

さて、これからしっかりと完結までこの物語を書いていこうと思うので、

お付き合いできる方、ぜひよろしくお願いします。

誤字、脱字のチェックは一応していますが、見つけてくださった方、ぜひお教えください。

## 第1話 ゆ、夢の中で会ったような？

誰かが泣くのは嫌いだ。

なんでって聞かれると、はっきりとした理由は答えられないし、いつから、どうしてそんなふうになるようになったのかも分からない。だけど、これは俺がずっと思い続けていることで、きっとこれからもずっと思い続けていくことなんだと思う。

.....

「...せいつ。」

無機質な電子音を鳴らし続けるチョップで沈黙させる。

時計の針は短針が7、長針は12を指している。どうやら今日も朝がやってきたらしい。

そうと分かれば、と早速学校へ行く準備を始める。

身を起こし、洗面台へいき、歯を磨き、顔を洗い、それが終わったらキッチンへ行き、朝食の準備。

今日は洋風にしようなんて考えながら、食パンをトースターにセットし、フライパンに油をひきハムエッグを作る。

朝食を作り終えるまでの所要時間はおよそ20分。そして朝食を10分で平らげ、制服に袖を通すと、コーヒーを淹れ15分ほどテレビを見ながらぐだぐだとすこす。

これが、俺 柳瀬旭の日課ともいえる朝の過ごし方だ。そんな日課

を一通りこなすと、玄関でインターホンが鳴った。

「おっ、今日も時間通り。」

このインターホンが俺にとっての通学開始の合図でもある。通学用のカバンを引っさげ玄関の扉を開けるとそこでは一人の少女が俺を待って立っていた。

「おはよう。旭ちゃん。」

短めのツインテールと少し小さめな身長が印象的な女の子。鹿目まどかだ。

付き合いは長く、初めてあったのはランドセルを背負う前。いわゆる幼馴染というやつである。

俺の14年という人生の中でまどかと過ごした時間が占める割合は多く、寝食こみでも半分ほどといっても過言ではないくらいだ。

「おっ。おはよう、まどか…って、リボン変えたのか。」

「あ、うん。派手すぎたりしないかな…？」

「いや、似合ってると思うよ。」

とりとめのない会話を交わしながら、通学路を歩く。家から学校までかかる時間はおよそ20分ほどで、HRは8時20分から。今日も特に急ぐことなく登校できるだろう。

他にも通学中の学生たちが散見してくるあたりで、見知った顔が俺たちを待っていた。

「おっはよー。二人とも。」

ショートヘアーの明朗快活が服を着て歩いているような少女、美樹さやかと

「おはようございます。まどかさん。柳瀬さん。」

いかにも育ちのよいお嬢様といったかんじで、いつも上品、かつ物腰柔らかな美少女、志筑仁美ちゃんだ。

二人ともまどかの無二の親友であり、俺にとっても特に親しい友人だ。

「今日も二人で一緒に仲良くご登校…。相変わらず妬けますな!。」

そう言いながらウリウリと俺のわき腹を肘で小突くさやか。

度々思うがこいつはいちいち言動や行動が親父くさい気がする。顔は可愛いのだが…。これが俗に言う残念な美少女ってやつか？

「おいおい。からかうなよ。いつものことじゃないか。つか、うつとおしいから離れる。」

ウリウリしてくるさやかのほっぺを手で押しのける。柔らかい。

ちよっ、顔はやめてよ顔は などと抗議の声が聞こえたような気がするがスルー!。

「でも、本当に仲がよろしいですね。まるでお付き合いしているみたい。」

「も、もうっ二人とも。私と旭ちゃんはただの幼馴染だってば!。」

…いや、確かにそのとおりなのだが。

そう力一杯否定されると少し悲しくなってしまうのは気のせいだろうか？

「じゃあ、まどかはあたしがもらう！まどかはあたしの嫁になるのだー！」

そして、まどかに後ろから抱きつくさやか。

「ええっ！？さ、さやかちゃん！？」

「あっ！さやかてめえ、まどかを嫁にもらうんなら俺を倒してからにしるー！」

「上等だー！ほあちゃー！」

「こんなの絶対おかしいよ！？」

「…コホン。」

さやかと小突きあっていると仁美ちゃんが咳払い。

何事かとあたりを見てみると、周囲の学生たちの視線が、俺とさやかに集中していた。

…そりゃ、道のご真ん中でどつき合っただけなら当然か。

「…し、失礼しましたー…。」

いいタイミングでなってくれた、予鈴とともに、俺たちはそそくさと教室へ向かうのだった……。



転校生を廊下に待たせて、自らの近況に関して熱弁する教師ってどうよ？などと思っていると教室のドアが開き、一人の少女が入ってきた。

腰のあたりまで伸ばした髪に、美少女といってもなんの遜色のない容姿。

クラスでもほとんどの人間が彼女に注目していた。すごい存在感である。

「暁美ほむらです。」

そして、ホワイトボードに自分の名前を書き、沈黙。

…どうやら自己紹介はこれで終わりらしい。教室のみんなもそれを察したのか、まばらに拍手が起こり始める。

「え、えー、暁美さん？」

先生もこの淡白な転校生の自己紹介に困っているのか、少しオロオロしている。

まあ、あれじゃあ間がもたんだらう。

昨日は彼氏に振れら、その翌朝には気難しそうな転校生の紹介…大人の世界は厳しいらしい。

自己紹介を終え、そのまま席につくのかと思っただが、暁美はクラスの一点を見つめていた。

…まどかの所だ。が、それもごく短い間。その後すぐ、暁美は教室の空いている席に座った。

「では、今日の朝のHRは終わりです。皆さん今日も一日がんばってくださいね。」

HRが終わり、早乙女先生が教室が出て行くと、すぐさま暁美の周りには女生徒たちが集まっていく。大方、転校生恒例の質問ぜめというやつだろう。

「不思議な雰囲気の人ですよ。ね。暁美さんって。」

「ねえまどか。さっきの子と知り合い？なんか思いつきりガン飛ばされてなかった？」

「いや、えつと……。」

が、この3人娘はそんなクラス流れなどなんのその、いつものメンバ―で転校生の話題で盛り上がっている。

「まつ、ガン飛ばしてたのかどうかはわからんが、まどかの方見たのは、間違いなっつぽいな。」

「さやかでも気付いたわけだし。」

「はあ？あんだそれ何が言いたい

「ちょいまち。うわさをすればなんとやら、だ。暁美、こっちに来るぜ。」

反論するさやかを押さえ、ひとまずは様子を見ることにする。

「鹿目まどかさん。あなたがこのクラスの保健係よね。つれってつて貰える？保健室。」

「え？えつと……あの……。」

「あー、失礼。曉美さん？」

案の定、というべきか、まどかに話しかけてきた曉美とまどかの間にすかさず割ってはいいる。

さっきの視線がどこのというのは考えすぎだと思っがビビりまくっているまどかを放っておくことなんてできなかった。

「勘違いしてるようだからいっとくけど、このクラスの保健係、俺ね。」

当然、嘘である。が、すかさず3人にはここは俺に任せておけとアイコンタクトを送る。

伊達に長い付き合いはしていない。3人もいつもこういうときは、いつも俺の意思をすばやく汲み取ってくれる

「あれ？旭って英語の教科係じゃなかったけ？」

そんな風に考えていた時期が俺にもありました。

とりあえず、さやかからは後で昼飯のおかずを一品、搾取しよう。今決めた。絶対にやる。

「この前の学級回で総入れ替えしたじゃないですか。そのとき柳瀬さんが保健係に。」

そこに入る、仁美ちゃんのフォロー。実にナイスである。

「ま、そうゆうわけで、俺が新保健係の柳瀬旭。よろしく。保健室まで案内するよ。」

「…そう。じゃあお願いするわ。」



さつきからずっとこんな感じだ。

何を言ってもひたすらにスルーされる。

正直、居づらいことこの上ない。

…やはり先ほどの一件で怒っているのだろうか。

表情を窺い知ればと思うが、暁美は俺の前を歩いているのでそれはかなわない。

どうしたものかと思案に明け暮れていると、不意に暁美が口を開いた。

「一つ、聞いてもいいかしら？」

「ん？あ、ああ。俺に答えられることなら。」

「あなたは鹿目まどかとはどういった関係なの？」

「へ？」

質問の意図が分からず思わず、素っ頓狂な声を上げてしまう。

俺とまどかの関係？

なんだってまたそんなことを聞くのだろう。

そんな考えが伝わったのか、暁美は理由を付け足した。

「あなたと鹿目まどか、この年頃の男女にしては随分と仲が良いみたいだから、気になって。」

「仲がいいっていつでもな…。ただの幼馴染だぞ？」

俺がそう返すと、暁美はいきなりこちらを振り返った。

「…なんだ？人の顔まじまじと見て。」

「…いえ。なんでもないわ。」

暁美はきびすを返し、再び歩き出す。

「あ、おい！つかなんで前歩くの！？」

「案内ならもう結構よ。保健室の場所なら知ってるから。」

あ、やっぱり知ってるのねなど思っている俺を尻目に、暁美は一人で保健室に向かっていってしまった…。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「とまあ、こんなことがあったわけだ。」

「…なにそれ？文武両道で才色兼備かと思えば実はサイコな電波さん？」

午前の授業が終わり、昼休みになった俺たち4人は、学校の屋上で弁当 俺は購買で買ったパンだが を突いていた。

そこで話題としてはかなりホットな先ほどの保健室までの道程での話しと相成ったわけだ。

「さーな。俺にも何がなんだかさっぱりだ。」

と、肩をすくめながらさやかの弁当箱から春巻きを一本かつさらう。美味である。

「あーこの馬鹿旭！あたしの春巻き返せ！」

「残念。もう腹の中だ…っておい。箸で突くな。箸で。お前が思ってるよりずっと危ないからな？これ。」

繰り出されるさやかの箸による刺突攻撃を紙一重でかわしていく。なぜこいつはいつも手が出るのが早いのだろうか？

「でも旭ちゃんごめんね？私のせいで…。」

なんだかおとなしいと思つたら、うつむきながら俺に謝罪するまどか。

「別にいいよ。俺から首突っ込んだことだしな。それに転校生の毒電波くらいどうってことねえよ。」

そんなことより、だ。まどか、本当に暁美と初対面じゃないのか？向こうはどう考えてもお前のこと知ってるぞ？

「んー。常識的にはそうなんだけど…。」

「じゃあ、非常識なところで心当たりがあると？」

「ゆ、昨夜あの子と夢の中で会ったような…。」

「ゆ、夢の中で会ったような？」

この場の全員の時間が一瞬とまる。

が、すぐにこらえきれなくなったのか

「ぶっ…。くっ、ははははは」

まどか以外の三人は声を合わせて笑い声をあげる。

「いや、お前ら…くっ…わ、笑うな。おそらくまどかはマジだ…。いや、だが、しかし…ぶっ。」

「ひどいよ皆！というか旭ちゃん笑いすぎだよ！？」

「夢ってどんな夢でしたの？」

俺とさやかは先ほどの爆笑の余韻が冷めやらず…といったところだが、すでに落ち着いた仁美ちゃんはまどかの夢に関して突っ込んでいた。

「それがなんだかよく思い出せないんだけど、とにかく変な夢だったってだけで…。」

「もしかしたら、本当は暁美さんと会ったことがあるのかもしれないわ。」

まどかさん自身が覚えていないつもりでも深層心理には彼女の印象が残っていて、それが夢に出てきたのかもしれない。」

「おお。さすが仁美ちゃん。なにやら言ってることがそれっぽい。」

「そう？なんだかできすぎてない？」

「まっ、真相なんてどうせ暁美にしかわからねえんだ。どう想像し

ても自由だろ？

と、いうわけで俺は晧美はガチレズのストーカーでまどかの貞操を狙っているとみた。

きつと、まどかが昨日見た夢も、晧美の呪いの的ななにかに違いない。  
「

「ええっ！？そんな怖いこと言わないでよ…。」

「冗談だよ。冗談。そんなことあるわけないだろ？それに何かあったとしても俺がなんとかしてやるって。」

そう言うと俺はまどかの頭なでた。

これをやると、まどかも安心できるし、俺も心の奥がほっこりしてくる。実に幸せな行為である。

「もう…。旭ちゃんはいっつもへんなこと言うんだから…あれ？」

「どうした？まどか。」

「旭ちゃん。ちょっと手、見せて？」

「あ、ああ…。」

言われるがまま、先ほどまでまどかの頭の上に置いていた手を見せる。

「旭ちゃん、こんな指輪してた？」

「指輪？」

まどかに言われて自分の右手を見る。  
確かにまどかの言うとおり、右手の中指に金属光沢を放つ指輪がはめられていた。

「あれ、ほんとだ。あんた、指輪なんてはめる趣味あつたっけ？」

「いや、んなもんねえよ。なんだこの指輪。全然見覚えねえ。」

俺がそういうとまた、一同の時間が止まる。

「あー、やっぱりあんたら本当に仲いいわ。」

「そうですね。なんだかすこし素敵ですわ。」

「そんなこと言いながら一歩引かないで！そしてなんでまどかには寄ってくるの！？」

.....  
.....  
.....  
.....

「何なんだ？この指輪……。」

今日も帰りのHRが終わり、放課後になった。  
が、俺は帰ろうとせず、例の指輪を観察していた。

特徴としてはなにかの金属製で、なにやらよくわからない模様と、黒い宝石？のようなものが埋め込まれていた。

デザイン的にはどこにでも売っている……といったものではなさそう

で、しかも中々に値が張りそうな感じだ。

「旭ちゃん、帰らないの？ってさっきの指輪眺めてる……。」

「ん、まどかか。…ま、別にいいか。あつて困るものでもないし。で、なんか用か？」

再び指輪を右手中指にはめるとまどかに向き直る。

「これから、さやかちゃんと二人でCD屋行こうと思っただけど、旭ちゃんもどうかなって。」

「さやかと二人？仁美ちゃんは？」

「お茶のお稽古だつて。」

「相変わらず忙しいな。まっしやーないか。俺も付き合っよ。」

.....  
.....  
.....  
.....

CDショップにて、適当にCDのラベルを見て回っていると、まどかがどこか挙動不審になっていることに気付いた。

「なにキョドってんだ？」

「あ、旭ちゃん。え、えつとね、理由はいえないんだけど、ちょっと一緒に来てくれないかな？」



「その、笑わないで聞いてね？」

さっき頭の中で助けてって声が・・・」

そのとき、天井で何かはずれたような物音。それが何か天井から落ちてきた音だと、直感的に認識するとつさにまどかをかばう姿勢をとる。

「天井が落ちたみたいだな。怪我ないか？まどか…ってなんだ？ぬいぐるみ？」

天井が落ちてきたと思ったら、一緒に、白い猫と狐を足して2で割ったような珍妙なぬいぐるみが落ちてきた。なにやらポロポロで、体のところどころが切れ、赤い下地のようなものが見える。

「はあ…はあ…。」

！  
ぬいぐるみかと思ったが息をしている。生き物なのか？  
ならこれは怪我？何かに襲われたのだろうか？

「っ！大変！」

俺がそんなことを考えているとまどかがなぞの生物の元に駆け寄るとそのまま抱えあげた。

その直後、上方で鎖が揺れる音。何事かと思い上を見ると、上から何か降ってきて…

「って、曉美！？お前こんなとこでなにやってるんだ？つかその格

好なに？」

曉美はなにやら、白と黒が基調のセーラー服のような格好をしている。

まさに、なんらかのアニメキャラのコスプレのようだがいかんせん、状況と絶望的にかみ合わない。

「そいつから離れなさい。鹿目まどか。」

そいつというのはこの白い生き物のことだろうか？

なんにせよ、俺はまどかを庇うように前出る。

「おいおい。なんだかよくわからんが、動物虐待か？愛護団体に訴えられるぞ？」

「…あなたには関係のないことよ。どきなさい。」

こちらに歩を進めてくる曉美。

今の彼女からは殺気…というかなんというか、とにかく凄まじいプレッシャーを感じる。

正直めちやくちや怖い。

「だ、駄目！ひどいことしないで！」

が、まどかの手前引き下がるわけにはいかない。

俺は依然、まどかを庇う姿勢を保つ。

「あまり手荒な真似はしたくはないのだけれど。」

それはつまり、俺が引き下がらなければ、何らかの強行手段に出る

ということか？

冷や汗が頬を伝う。なんとかしなければ、と思うが思考が働かない。  
その時

「…っ。」

なんらかの噴射音。

「まどか！旭！こっち！」

さやかの声。これが真っ白になっていた思考をクリアにする。  
即座に声の聞こえた方向を判断するとまどかの手をつかみ、走り出す。

「ナイスださやか！今まで空気の読めない子とか思ってたてゴメン！」

「あーもう！こんな時に殴りたくなるようなこと言うな！」

つか、なんなのあいつ！？コスプレで通り魔！？そしてその生き物は！？

「わかんない…！わかんないけど、この子助けなきゃ！」

「とにかく、とつとと逃げるぞ。早く人のいるところに出よう。」

出口を目指して三人で走る。だが…妙だ。出口まではそんなに距離はないはず。

なのに一行に出口は見えない。いや、それ以前に…

「変だよ…。どんどん道が変わっていく！」

まどかの言うつように、確かに道がどんどん変わっていく。建物の中を歩いていたはずなのにいつの間にか、周囲には変な塔があったり、あるうことか空中を走る線路なんてものまで会った。

「なにこれ…。どうなってんのさ！」

「…まで、何かいる。」

俺のその言葉を皮切りに、綿毛に髭と足が生えたような不気味な、生物とっていいのかわからないモノが集まってくる。

そこそこの数があつまると、なにやら歌のようなものを歌いだした。続々と集結してくる綿毛。数が多くなるにつれ、はさみのようなものを取り出し始める。

正直、訳の分からない状況だが、二人を守らなければ、という意識のおかげで頭ははつきりしている。

「このままじゃ 囲まれる。二人とも、走るぞ。」

ちようどいい具合に落ちていた鉄パイプをつかむと、それを綿毛どもに投げつける。

そうして開けた道を、二人の手をつかみ、一気に走りぬける。

…よし、こうして、この場を切り抜けることさえ出来れば、出来ることが一気に増えるだろう。  
しかし…

「きゃっ！」

「まどか！」

小動物を小脇に抱えたまどかは付いてこれず、転んでしまう。

まずい。これはまずい。後ろからははさみを鳴らしながら綿毛がせまる。

「くそっ！」

まどかを庇うために覆いかぶさる。そして俺の首筋にははさみがせまり…

「旭！」

さやかの声が聞こえる。迫ってくるはさみがスローモーションで見える。

眼前に迫る死を認識し、目をつぶる。

あー、俺このまま首切られて死ぬのかな？

そんなことを考えていたが、いつまでもそのときは訪れない。

先ほど、綿毛のはさみがスローモーションに見えたがそのせいかな？

だが、それにしても時間が長すぎるような…。

その答えは、目を開けてみればすぐにわかった。

驚くべきことに、俺の首を切ろうとしていたはさみはなんと粉々に砕けていた。

「旭…あんたそれ…。」

驚いたような、おびえているようなさやかの声。

それもそのはず、まどかを庇おうとした、俺の体は黒い鎧のような物をまとっていた。

「じ、じりゃ一体…？」

何が起きているかまったくわからない。だが、一つだけはっきり

と分かっていることがあった。  
勝てる！今の俺はこの綿毛どもより強い！

「うおおおおおっ！」

気合の声とともに周囲の綿毛どもに回し蹴り。

それを食らった綿毛は断末魔の叫びとともに消え去った。

だが、依然として綿毛どもはうじゃうじゃとはびこっている。

俺はまどか、そしてさやかを脇に抱えあげると、跳躍。

通常の間ではありえない跳躍力で高く飛翔し、まどかとさやかを綿毛どもから遠く離れたところにおろす。

「あ、旭ちゃん…？」

「少しの間じつとしてくれ。あいつらを倒してくる。」

俺は再び高く飛翔し、綿毛の群れの中へと突っ込む。

そして、襲い掛かる綿毛を拳で、蹴りで叩き潰していく。

半分ほどの綿毛を潰したあたりで、綿毛たちも俺にはかなわないとみたのか、今度はまどかたちを指して進みだす。

「っ！やべえ！」

綿毛たちを追い、どんどん叩き潰していく。

だが、半分ほどを潰したとはいえやはり数が多い。それを徒手空拳で逐一潰していくのだ。

数匹を取り逃がし、それがまどかたちへと襲い掛かる！

当然、黙って見ているつもりはない。全力でまどかたちの下へと駆ける。だが…間に合わない。

絶体絶命…そう思われたとき、どこから飛んできた、ビーム？が綿



## 第1話 ゆ、夢の中で会ったよつな？（後書き）

第1話終了。

とりあえず補足としていっておくと、旭君の見た目はプラスレイタ  
ーみたいな感じですよ。

あと、投稿済みの小説に関して。

投稿済みの小説は、作者が冷静になったあと読み直して

布団の中でもんどりうつた後に、修正、加筆等をさせていただく場  
合がありますのでご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9215s/>

---

魔法少女まどか マギカ Re-connect

2011年10月8日22時48分発行